

病害虫発生予察特殊報第1号

平成18年5月24日
三重県病害虫防除所

本県において、タバココナジラミ バイオタイプQの発生が初めて確認されましたので特殊報として発表します。

(参考)タバココナジラミ類には、形態的に識別困難な約40以上の系統(バイオタイプ)が知られています。国内ではバイオタイプ不明の在来系統とバイオタイプB(いわゆるシルバーリーフコナジラミ)の2系統が確認されていましたが、近年バイオタイプQが発見され、発生地域が拡大しています。

1 病害虫名 : タバココナジラミ バイオタイプQ (*Bemisia tabaci* Q-biotype)

2 発生確認作物名 : トマト

3 発生確認地域 : 木曽岬町

4 発生確認の経過

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所は、三重県内で採集されたタバココナジラミについてバイオタイプの検定をしていましたが、同研究所が平成17年8月14、19日に木曽岬町小林のトマトにおいて採集した標本がバイオタイプQであると、平成18年5月22日に確認されました。本県ではそれまでタバココナジラミ バイオタイプQは未確認でした。

本虫は1996年にスペインで初めて確認され、イタリア、イスラエル、中国等でも報告されました。国内では2005年に宮崎県において初めて確認され、平成18年5月17日現在、23都府県で発生が確認されています。

5 形態及び生態等

(1) 形態

シルバーリーフコナジラミ(タバココナジラミ バイオタイプB)との形態上の差異は、幼虫、成虫ともに確認されておらず、形態による区別は今のところ不可能です。

(2) 生理・生態

従来のコナジラミ類より薬剤抵抗性が発達しやすいことが知られています。そのため、バイオタイプQが侵入したことに気がつかずにそれまでの防除薬剤を使い続けると、従来のコナジラミ類からバイオタイプQに置き換わってしまうことがあります。詳細な生態は不明です。

(3) 寄主作物

本県では、トマトにおける寄生を確認しましたが、他県ではこのほかにナス科(ミニトマト、ナス、ピーマン、パプリカ、シシトウ)、ウリ科(キュウリ、メロン)、アブラナ科(茎ブロッコリー)、ユリ科(アスパラガス)、シソ科(シソ、セージ)、ヒルガオ科(サツマイモ)、キク科(ガーベラ)、トウダイグサ科(ポインセチア)などで発生が確認されています。

6 被害

シルバーリーフコナジラミと同様の被害を起こすと考えられ、少発生でもトマト黄化葉巻ウィルス(TYLCV)の媒介が問題となります。多発すると、成虫の吸汁による生育障害、幼虫の分泌物に起因するすす病による葉・果実等の汚れも問題となります。

7 防除対策

(1) コナジラミ類、タバココナジラミ、シルバーリーフコナジラミのどれかに登録のある農薬なら、当面の間はバイオタイプQのタバココナジラミに登録があるものとみなされています。

(2) 他県でシルバーリーフコナジラミに比べて、ピリプロキシフェン剤(ラノーテープ等)、一部のネオニコチノイド系薬剤、合成ピレスロイド系薬剤に対する感受性が低いことが報告されています。使っている薬剤の防除効果が低すぎると感じた場合には、薬剤を変更してみてください。

(3) 施設の開口部(天窗・側面・出入り口等)には防虫ネット(0.4mm目合いが望ましい)を張り、コナジラミの飛来侵入及び外部への飛散を防止すること。目合いが細くなるほど換気が悪くなるので、温度管理には注意すること。

(4) トマト黄化葉巻病の発病株は二次感染源となるので、見つけしだい株ごと抜き取ること。

(5) 圃場周辺の雑草はタバココナジラミの増殖源となり、野良生えトマトは本病自体の発生源となるので、圃場周辺の除草管理を徹底すること。

(6) 作付けを終了する場合は、必ず密閉処理(蒸し込み)するなど完全にタバココナジラミの死滅を図ること。

(7) 薬剤については、最新の登録情報(<http://www.acis.go.jp/searchF/vtllm000.html> 農薬検査所ホームページ 農薬登録情報)を参照し適正使用を行ってください。